

# 天声人語

この夏、芭蕉の弟子たちに関する本を何冊か続けて読んだ。きっかけは東京都江東区の芭蕉記念館で見た「芭門十哲」展。其角、嵐雪ら門人たちの織りなす意外にどろどろとした人間関係を知ったからだ▼たとえば許六一。△十団子も小粒になりぬ秋の風』という句を師に激賞され、彦根俳壇を率いた。世だが『芭蕉の門人』（堀切実著）によると、何かと大言壯語する癖があった。世にもてはやされた其角や支考の作風にケチをつけ、師の神體を継ぐ者は自分ひとりだと見えを切つた▼△五位六位色こきませよ青簾△△黄菊白菊其の外の名はなくもがな）。そんな句を残した嵐雪は、其角と並び称される高弟だった。だが芭蕉との関係が冷え、師の没後は俳壇でたちまち勢力を失う▼近江の路通は路上生活者である。『乞食路通』（正津勉著）を読むと、旅の芭蕉と出会い、1首を詠んで弟子入りを許された。だが品行に難があり、門人たちには嫌われる。へいねくと人にいはれつ年の暮）。『去れ』△去れ』と座から追われるような目に遭つたらしい▼これら芭蕉一門の歩みをたどつて浮かぶのは、残念ながら、鉄の結束などではない。むしろ自派の拡大に汲々とし、他派を牽制する男たちの姿である▼芭門の作品群は日本の短詩文化の精髄だろう。だが、きらめく水面の底では嫉妬や駆け引き、蹴落とし合いが繰り広げられた。いつの時代、どこの組織にも見られる人くさき営みを風雅の極みの芭門を見て、なぜか妙に安堵した。

2017・8・19